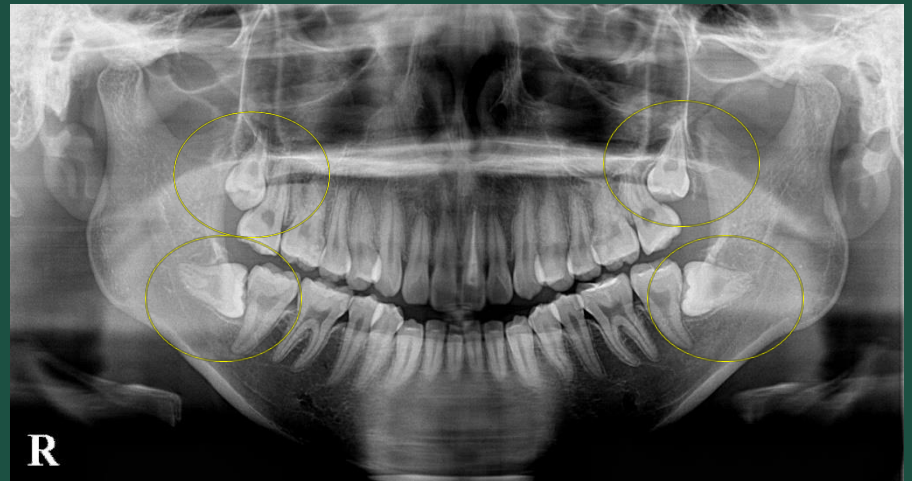


# 難しい抜歯

## <親知らず>

親知らずは智歯、第三大臼歯とも呼ばれます。生まれつき欠損していることもあります。歯があるのに顎骨のなかに埋まったままで萌出しない(埋伏歯)場合も少なくありません。下顎の親知らずではたとえ萌出しても傾斜したり、水平位に半分埋伏(半埋伏)したりすることはよく知られています。このような萌出異常を起こしている親知らずは、第二大臼歯(親知らずの手前の歯)の後ろの面を不潔にし、放置すると深部にう蝕(むし歯)を作ります。また、智歯のまわりは不潔になりやすく、しばしば炎症を起こします(智歯周囲炎)。よって、そのような状態の親知らずは通常抜歯の対象となります。埋まっている親知らずの抜歯には、通常のアナesthesiaに加えて伝達麻酔といわれる顎が半分しびれる麻酔を併用して抜歯時の痛みを取り除くこともあります。また歯肉(歯茎)の切開、骨や歯の削合が必要となってきます。このような抜歯は専門性が高いため、当院では経験豊富な口腔外科医が難しい抜歯を担当します。また比較的稀ですが、埋伏智歯から嚢胞(のうほう:膿などが溜まった袋)や腫瘍(しゅよう)が発生することもあり、このような場合は全身麻酔下での手術が必要となる場合がありますので、当院連携の病院歯科口腔外科と連携して判断する場合があります。



## <埋伏歯、埋伏過剰歯>

通常の歯の本数よりも多く形成された歯を過剰歯といい、口の中に生えてくる歯と顎骨の中に埋まっている歯（埋伏過剰歯）があります。埋伏過剰歯は上顎の正中に多く、正常な永久歯の萌出に影響することもあるため、早期の精査が必要となります。抜歯が必要であれば、年齢や埋伏状況によって時期を検討します。

